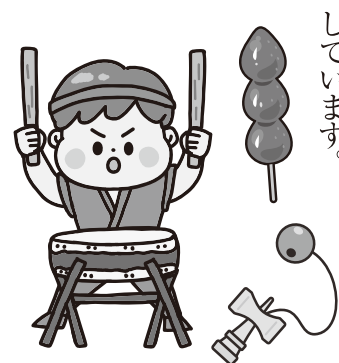




◆ 中町・蔵シツク館の「お座敷遊び」◆

が訪れました。筆者も、小学生の息子と共に、中町通りから縄手通りへと巡ってみる

息子は、中町ではイチゴ飴、縄手通りでは飴細工という飴、三昧を堪能。けん玉体験では、親子で新しい技を習得し、和太鼓のリズムで身体はホカホ



30年以上も前のことです。当時、浅間の温泉地などでは、芸者のお姉さん方を呼んで宴に花を添える様子もまだ見られ、中町の店にも、着物姿のお姉さん方がお顔を見せてくれたものでした。

文化に触れ、体験できる催しが開かれました。令和3年に縄手通りで始まった「松本ジャポニズム」に加わる形で、「縄手も中町もジャポニズム」と称し初開催したそうです。以前から、縄手通りと中町通りの間で、催しの共同開催が持ち上

がつていたのだそうです。しかし、コロナ禍を経て、中町通りでも多くの店舗が廃業や業態変更を余儀なくされました。そして、町のイベントの在り方や方法もまた、変化してきました。

昨年の春以降、国内外からの観光客は順調に回復し、二つの商店街の夢の企画は、ようやく実現しました。

中町・蔵シツク館の建物は、以前から芸能の発表会などに利用されています。この日は松本知優佳会の端唄、清扶美会の民謡、飛鳥乃白鳳会の日本舞踊などが披露されました。「お座敷遊び」の体験会では、筆者も初めて「こんぴらふねふね」に挑戦。海外観光客に混じって着物姿のお姉さん方と笑顔の絶えない時間を過ごしました。

力。わざわざ遠出をせずとも、親子で一日楽しめる催しが身近に企画される地域を誇らしく感じました。観光客はもとより、地元の方にもさらに広がり、日本の伝統文化や芸能がより身近になるように、今後も商店街の垣根を超えた取り組みに期待しています。

垣根を超えた「ジャポニズム」



令和6年5月1日現在

世帯数 : 861世帯

人口 : 1501人

男 : 703人

女 : 798人



◆ 太鼓演奏と飴の販売 ◆

公民館
『再発見』

先の大戦後、日本国民への民主主義の普及や社会教育を推進する制度として全国に広まった公民館。現在国内におよそ13,000館あります。平成11年をピークに年々減少傾向にあります。

第2次世界大戦終了直後の1946年、文部省(当時)が、地域の人々が集い学ぶ拠点として設立を奨励した公民館は、当時は敗戦後の極めて貧しい時期でしたが、瞬く間に全国に普及し、社会教育施設として住民の間に定着しました。

「公民館は、市町村その他一定区域内の住民のために、実的生活中に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、もつて住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与すること」が掲げられています。(社会教育法 第20条)

そして「公民館は、市町村が設置する」とされ、定期講座の開設や、討論会・講習会・講演会等の開催、図書・記録・模型・資材等を備え、その利

用を図ること、体育・レクリエーション等に関する集会の開催、各種団体・機関等との連絡、その施設を公共的利用に供すること等を行うとされています。(社会教育法 第21条第1項 第22条)

公民館の利用状況については現在、60歳以上の年配者そして女性の利用が一番多いようです。

公民館の主要な役割、社会教育とは、「学校で行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動(体育及びレクリエーションの活動を含む。)」と定義されています。(社会教育法 第2条)

広義の教育とは、

一個の人間に、生れ落ちてから生きていくのに必要な行動様式、知識を付与する活動です。

最初の教育は普通、その人間が生まれた家庭において両親その他の家族が中心で行われ、や

がて、近隣の人たちや幼稚園、学校に広がっていきま

場や周囲の社会から受ける教育が中心になっていきます。法律や慣習、職業上の知識、種々の常識などが教えられ、最近では終活とかで死に方まで教えられます。まさに人間とは一生涯学習を続ける存在です。公民館の役割は、そんな学校以外における社会教育に資することにあり、場所、設備、関係する人や団体、機関との連携を提供する制度ということとです。テレビ、書籍、インターネットなど、知識を得る手段は近年とみに増えま

れます。しかし、より良い生活、人間関係、幅広い知識や健康増進など、公民館の秘めている潜在機能を利用しないのは、おそらく相当の利益の逸失と言えるでしょう。公民館見直し運動始めませんか。



公民館は社会教育を通して地域のつながりを創出します

令和6年度 第一地区町会役員(敬称略)

【町会長】		【町内公民館長】	
上條 誠二	内藤 昭英	上條 誠二	内藤 昭英
猿田 弘行	村山 孝幸	猿田 弘行	村山 孝幸
太田 隆秀	中原 正勲	太田 隆秀	中原 正勲
甕川 修介	岩原 正秀	甕川 修介	岩原 正秀
宮坂 賢吾	縣 中博	宮坂 賢吾	縣 中博
井井 健至	田 的場	井井 健至	田 的場
桐原 崇光	深澤 (同左)	桐原 崇光	深澤 (同左)
藤澤 淳次	寺沢 厚子	藤澤 淳次	寺沢 厚子
山越 修 (同左)	塩原 信一	山越 修 (同左)	塩原 信一
田中 芳樹 (同左)	(同左)	田中 芳樹 (同左)	(同左)
安部 孝介 (同左)	(同左)	安部 孝介 (同左)	(同左)
春日 富士子 (同左)	(同左)	春日 富士子 (同左)	(同左)
新井 宏和	中畑 幸子	新井 宏和	中畑 幸子
村田 正久	伊藤 善輝	村田 正久	伊藤 善輝
杉山 陸弥	羽山 貴子	杉山 陸弥	羽山 貴子
福田 真道	細谷 (同左)	福田 真道	細谷 (同左)
増田 道憲		増田 道憲	

慣れ親しんだ「はやしやデパート」だった建物が「パルコ」になったのは、私が大学生の時だった。都内のおしゃれスポットにあるその大学は、比較的出身者が少なく、「長野県出身」というと、涼しい顔で「あら、おうちはリンゴ農家かなにか？」などと言われ、「パルコまで歩いて30秒のところに実家があるの」というと、びつくりされたことを思い出す。

「パルコ」は当時、ファッションの最先端であり、一つの文化だった。広告宣伝も画期的で、1980年代から90年代、コピーライターという職業の人々が繰り出す、魔法のような惹句に心奪われた。田舎の百貨店とは一味違う、文化の香りが漂っていた。

田舎の百貨店が大好きな私には、渋谷パルコは、少しアウェイな感じだったように思う。

子どものころ「今日はデパートにお買い物に行く」と告げられたときの、あのわくわく感が懐かしい。松本パルコがなくなっても、わくわく感のあるまちでありますように。